特發性急性出血性小兒膀胱炎(小野澤氏)=就テ 附 感 冒 性 膀 胱 炎

大阪市立市民病院皮膚科長

醫學博士 久 保 山 高 敏

The Dermato-Urological Clinic of the Osaka City Hospital
(Director: Dr. T. Kuboyama)

Cystitis haemorrhagica acuta idiopathica infantum (Onozawa) and Cystitis resulting from a cold.

by

Dr. Takatoshi Kuboyama.

we sometimes observed that the children, who without special cause suddenly had frequency, complained of pain between urination and haemorrhage (especially terminal haemorrhage). We found some pus in the urine but no bacillus. The prognosis of this disease is very good, many of the patients by keeping quiet in bed and suitable treatment were cured in from 5—10 days.

4 years ago Mr. Onozawa reported the statistical observation of this disease in 71 cases and he named it "Cystitis haemorrhagica acuta idiopathica infantum".

I observed 50 cases of this disease during 10 years.

There were many patients in the warm season (summer and autumn), and males (45 cases) suffered more than females (5 cases). 38 cases (76%) were suffered by children under 15 years old, 11 cases young men and women 16—30 years old and 1 case above 30 years. In 7 cases cystoscopy was carried out. 5 years ago I reported one case of cystitis resulting from a cold in a boy aged 16. (Jap. Journal of Dermatology and Urology. Vol XXXI). Symptoms, prognosis and cystoscopical examination of this disease, in some points, resembled very much cystitis resulting from a cold that I reported before.

For this reason I think the cause of this disease must be a cold of the bladder.

(Authors abstract)

目

次

- I 緒 言
- II 本症ノ歴史
- III 症 例
- IV 年 度
- V 總 括

- 1) 發病ヨリ初診迄ノ日數
- 2) 性的關係
- 3) 年 齡
- 4) 季節的關係
- 5) 誘 因

- 6) 症 狀
 - イ) 主訴 ロ) 全身症狀
- 7) 尿 所 見
 - イ) 膿球 ロ) 細菌
- 8) 治 療
- 9) 經過及ビ豫後
- 10) 膀胱鏡所見
- 11) 原 因

- 附 感冒性膀胱炎=就テ
 - 感冒性膀胱炎ト特發性急性出血性小兒膀胱炎トノ異同問題
 - イ) 兩症ノ相類似セル點
 - ロ) 兩症ノ相異レル點
- 12) 本症ノ命名=就テ
- Ⅵ 結 論
- 文 獻

I. 緒 言

吾人泌尿器臨床家ハ4—5歳ヨリ10歳、時トシテハ14—15歳位ノ小兒=シテ殊=男兒=多ク何等特別ノ原因ナクシテ突然尿意頻數、排尿痛及ビ血尿(殊=終末出血)ヲ訴フ患者=接スルコト少ナカラズ。或ハ時トシテ膀胱結石ヲ疑ハシメ或ハ甚シキハ腎臟結核ヲ疑ハシム。而モ其ノ豫後ハ極メテ良好=シテ、安靜=シテ適當ナル療法ヲ施ス時ハ數日乃至1—2週=シテ治癒シ得ベシ。從來或ハ單=小兒ノ急性膀胱炎トシテ取り扱ハレ、或ハ急性腎盂膀胱炎トシテ取り扱ハレタリ。本症ハ通常10歳以下ノ小兒(殊=男兒=多シ)=頻發スルガ、余ノ觀察=依レバ16歳乃至20歳或ハヨリ以上ノ青年男子=來ルコトモ稀ナラズ。然モ成書=依ルモ記載ナク、文献ヲ徵スル=泰西=於テモ極メテ少ク、本邦=於テモ其ノ報告未ダ多カラズ。昭和6年余ハ「濕潤寒冷=因ル急性膀胱炎ノ1例」ヲ報告セリ。該報告例ヲ假=感冒性膀胱炎ト名ヅクレバ此ノ特發性急性出血性小兒膀胱炎ハ其ノ尿中=細菌ヲ證明セザルコト並=其ノ症狀經過及ビ膀胱鏡所見等ガ該感冒性膀胱炎ト相類似スル所少カラズ。此レ余ガ本症例ヲ集メテ考察シ諸家ノ批判ヲ仰ガント欲スル所以ナリ。

Ⅱ 本 症 ノ 歴 史

大正3年日本泌尿器科學會總會=於テ豐福環氏⁽¹⁾ハ「小兒膀胱炎=就テ」ノ報告ヲナシタルガ氏ハ膀胱炎ト腎盂膀胱炎トラ混同セシガ如シ。次=本症=最早ク注目シタルハ高木繁氏⁽²⁾=シテ氏ハ大正11年「小兒=於ケル急性尿道膀胱炎ノ原因=就テ」ノ題ノ下=10歳迄ノ小兒殊=男兒=於テ別=原因ノ徵ス可キ無クシテ尿意頻數、放尿終末時疼痛、血尿等ヲ來シ「ウロトロピン」ノ類ヲ處方シ別=手當ヲ加ヘザルモ日ナラズシテ自然=治癒スルガ如キ場合=遭遇スルコト稀ナラズト報告セリ。氏ハ其ノ1例=無數ノ尿酸結晶ヲ見、其ノ原因ヲ此ノ結晶=歸シ尿ト共=排出セラル、際膀胱頸部若クバ尿道攝護腺部=損傷ヲ來ス=アラズヤト云ヘリ。木村賢二氏モ亦結晶ヲ證明スト謂ヒ、小野澤氏ハ之ヲ否定セリ。余ガ觀察シタル50例中=ハ結晶ヲ證明シタルモノナシ。關嘉一氏⁽³⁾ハ同年「特發性膀胱出血=就テ」ト題シテ其ノ7例ヲ報告セリ。7—10歳迄ノ男兒=多ク7例中6例ハ血尿ト共=尿意頻數ヲ訴ヘタリ。排尿時ノ疼痛ハ4例=之ヲ見、季節ハ夏=多ク豫後ハ極メテ良好=シテ、發病後概シテ10日前後=テ全治セリト云

フ。大道直一氏⁽⁴⁾ ハ昭和4年, 7年間ニ小兒膀胱炎ノ20例ヲ觀察報告セリ。3—13歳ノ小兒ニシテ男兒15例女子5例ナリシガ, 其ノ半数ニ大腸菌ヲ認メ其ノ他雙球菌, 連鎖狀球菌ヲ合併セルモノアリシガ9例ハ全ク無菌ナリシト。氏ハ又小兒ノ膀胱炎ハ殊ニ終期血尿ノ多キコト(15例75%)ヲ注意セリ。木村賢二氏⁽⁵⁾ ハ昭和5年「小兒ニ於ケル血尿性尿意頻數症」ト題シテ23例ノ自家症例ニ關氏ノ7例ヲ加フルモ尙ホ本邦ニ於ケル報告ハ40例ヲ出デザルベシト謂ヘリ。其ノ結論ニ曰ク 1) 14—15歳迄ノ小兒殊ニ好ンデ男兒ヲ犯ス, 2) 血尿(多クハ終末性), 尿意頻數, 放尿時疼痛ヲ以テ主徴候トス, 3) 尿所見特有ニシテ赤血數多數ナルニ反シ白血球極メテ少數ニシテ細菌ヲ見出シ得ズ尿酸結晶ヲ證明シ得, 4) 豫後良好ニシテ1—2週ニテ全治スト。其ノ追加ニ於テ駒屋銀治氏⁽⁶⁾ ハ所謂膀胱粘膜紫斑病ナル病名ノ下ニ小兒ニ突然發生セル血尿患者ヲ見タリ。尿中無菌, 白血球ナク, 膀胱粘膜ニ出血竈アリシト。井尻辰之助氏⁽⁷⁾ ハ夏季ニ往々見ルモノニシテ小兒ヲ經過ノ急性ナルト無菌ナルト血尿及ビ尿意頻數ヲ特徴トスト指摘シ, 高木氏モ亦春ヨリ夏ニカケテ多キ様ナリト云ヒ, 高橋明氏⁽⁸⁾ ハ夏季ニ見ルコト多ク膀胱鏡検査ヲ行ヒタル後ハ其ノ症狀輕快スト謂ヘリ。

小野澤武男氏⁽¹⁰⁾ ハ昭和7年「特發性急性出血性小兒膀胱炎ノ統計的觀察」ト題シテ11年5ヶ月間ニ蒐集セル本症71例ニ就キテ詳細ナル統計的觀察ヲナセリ。中50例ニハ尿中ニ全ク細菌ヲ證明セズ, 21例ニハ少數ノ細菌ヲ認メタレドモ健康ナル尿道ニ存スルモノト數的關係ニ於テ大差ナク, 15歳以下ノ小兒ニ來リ4—7歳ニ頻發ス。成人ニハ17歳ノ男子ニ其ノ1例ヲ見タリ。性的關係ニ就テハ男子ニ多ク(71例中49例), 季節ハ冬期ニ多カリシト。主訴ハ血尿(殊ニ終末出血), 排尿時疼痛, 尿意頻數ニシテ全身症狀ハ一般ニ之ヲ認メズ。尿ハ濁濁乃至血性濁濁ニシテ蛋白ハ多ク之ヲ證明ス。尿中膿球ハ多ク之ヲ認ムト謂フ。氏ノ膀胱鏡検査ヲ行ヘルモノ5例ニシテ膀胱ノ粘膜ハ一般ニ發赤, 出血點アルモ潰瘍ハナク豫後ハ極メテ良好ニシテ1—2週ニテ治癒ス。長キモ1ヶ月ヲ超エズト。翻ツテ泰西ノ文献ヲ徵スルニ1929 Lieben (Wien) ハ下肢及ビ下腹及ビ腰部ノ寒冷ニ因ツテ Erkältungscystitis ヲ起スト謂フ。氏ハ婦人ニノミ觀察セルモノニシテ膀胱鏡所見ニ於テハ膀胱三角部ハ最モ著シク發赤セリ。又「インフルエンザ」ノ際ニハ男女ヲ問ハズ同様ノ膀胱炎ヲ起ス事アリ。其ノ膀胱鏡所見ニテハ粘膜ノ血管擴張, 散在性ニ發赤溢血ヲ見ルガ時トシテ小潰瘍ヲ見ルコトアリ。其ノ處置トシテハ膀胱洗滌, 「ウロトロビン」ノ内服又ハ靜脈内注射ヲ可トスト謂ヘリ。

Ⅱ. 症 例

余ハ大正14年10月ヨリ 昭和10年12月末日ニ至ル滿10年3ヶ月間ニ於テ本症ト認ムベキ者50例ヲ集メ得タリ。之ヲ一括シテ表示スル時ハ次ノ如シ。

第 1 表

番 號	姓 名	性	年 齡	入院 又ハ 外來	發病後	尿中 膿球	尿中細菌	治癒日數
1	淺野	男	5歲	入	2日	+	—	10日
2	出口	〃	6歲	入	2日	卅	大腸菌(+)	12日
3	木村	〃	8歲	外	3—4日	+	重球菌(+)	8日
4	井上	〃	9歲	外	5日	—	—	不明
5	松本	〃	9歲	入	1週	卅	—	13日
6	中田	女	5歲	外	3—4日	卅	—	8日
7	中辻	男	4歲	外	2週	卅	大腸菌(+)	3日後輕快
8	中島	〃	6歲	外	2日	卅	—	不明
9	北野	〃	6歲	入	3—4日	卅	球 菌(+)	8日
10	藤田	女	5歲	ハ	4日	+	重球菌(+)	18日
11	岡本	男	17歲	外	5日	+	—	不明
12	中井	女	5歲	外	4—5日	卅	重球菌(+)	不明
13	岡部	男	8歲	入	5日	+	—	12日
14	貴田	〃	15歲	外	1週	卅	—	不明
15	久保	〃	8歲	外	10日	卅	重球菌(+)	不明
16	水野	〃	7歲	外	1週	卅	—	不明
17	石川	女	12歲	外	2日	卅	大腸菌(+)	12日
18	田中	男	6歲	外	2日	+	—	3日後輕快
19	大北	〃	11歲	外	4日	卅	—	不明
20	乾	〃	10歲	外	1週	+	—	1週後輕快
21	中山	〃	10歲	外	3—4日	卅	重球菌(+)	10日
22	菱	〃	3歲	外	2日	卅	重球菌(+)	4日後輕快
23	加倉	〃	4歲	外	1週	卅	重球菌(+)	2日後輕快
24	川元	〃	4歲	外	5日	卅	重球菌(+) 葡萄菌(+)	8日
25	澁谷	〃	12歲	外	5日	卅	雜 菌(+)	4日後輕快
26	品川	女	25歲	外	3日	卅	桿 菌(+)	不明
27	下部	男	5歲	外	2日	卅	—	1週後輕快
28	山氏	〃	15歲	外	10日	卅	—	3日後輕快
29	喜多	〃	9歲	外	4日	卅	—	7日
30	岡田	〃	7歲	外	2日	卅	—	5日後輕快
31	伊藤	〃	10歲	外	3—4日	卅	球 菌(+)	不明
32	服部	〃	13歲	外	2日	卅	球 菌(+)	3日後輕快
33	村瀬	〃	19歲	外	2日	卅	—	5日後輕快
34	淺田	〃	15歲	入	5日	卅	—	12日
35	竹下	〃	20歲	入	1週	卅	—	2日後輕快
36	井脇	〃	4歲	外	2日	卅	—	不明
37	北村	〃	16歲	外	2週	卅	—	不明
38	辻田	〃	4歲	入	1日	—	—	2週
39	門野	〃	4歲	外	4—5日	—	—	不明
40	濱田	〃	6歲	入	1週	—	—	8日
41	大森	〃	9歲	外	1週	卅	—	11日
42	米澤	〃	8歲	外	4日	+	—	3日
43	吉岡	〃	17歲	外	5日	卅	—	7日
44	中西	〃	26歲	外	1週	+	—	7日
45	植田	〃	19歲	外	3—4日	卅	—	9日
46	森本	〃	5歲	外	4日	+	—	翌日輕快
47	堀毛	〃	16歲	入	2週	卅	—	18日
48	山田	〃	27歲	外	4—5日	卅	—	7日
49	水谷	〃	27歲	入	8日	卅	—	18日
50	及川	〃	56歲	外	1日	卅	—	4日

1. 尿意頻數, 2. 血尿, 3. 排尿痛, 4. 尿中蛋白ハ殆ンド全例之ヲ有セルヲ以テ記載ヲ略ス。

Ⅲ. 年 度

年度ハ表中ニ記載セザリシガ之ヲ調査スル時ハ次ノ如シ。

即チ初メ2—3

第 2 表

年間ハ1年間ニ

3—5名ヲ見タル

ガ昭和4年ニハ

僅カニ1名ヲ見

タルノミ。然ル

ニ昭和5年及ビ6

年ニ5名乃至10

名ヲ見タリ。昭

和7年ニハ1名モ

見ズ, 昭和8年ニ

ハ又8名ヲ見タ

リ。滿10ケ年間ニ50例ヲ見タルヲ以テ

平均1ケ年5名ノ割合トナル。

V. 總 括

1) 發病ヨリ初診迄ノ日數 小野澤

氏ハ發病ヨリ初診迄ノ日數ハ3日乃至4

日ヲ以テ最モ多シト謂ヘリ。

第 3 表

日	0—2	3—4	5—6	7—8	10	2週	計
人數	13	12	10	10	2	3	50

余ノ例ハ最モ早キモノハ前日最モ遅

キモノハ2週日ニシテ第3表ニ示スガ如

ク發病後2日乃至4日ガ最モ多ク, 小野

澤氏ノ所見ト略一致ス。之ニ次グハ5

日ヨリ1週迄ノ間トス。

2) 性的關係 通常ノ小兒膀胱炎ハ

一般ニ女兒ニ多シトセラレルガ, 本症

＝於テハ皆男兒ヲ以テ多シトセリ(高木, 關, 大道, 木村, 小野澤)。余ノ症例＝於テモ男子＝斷然多ク45例(90%)＝シテ女子＝少シ(5例10%)。

3) 年 齡 關氏(7例)ハ7—10歳＝最モ多シトシ淺見氏(8例)ハ4—5歳＝多シト謂ヒ, 小野澤氏(71例)ハ5歳ノ者最モ多ク4—7歳＝頻發スト云フ。又成人＝ハ17歳ノ男子＝1例之ヲ經驗セリト云フ。

本症＝就テ報告セラレタル諸氏ハ皆14—15歳以下ノ小兒＝シテ成人ト見做スベキハ小野澤氏ノ只1例アルノミナリ。余ノ觀察＝依レバ本症ハ小兒＝頻發スレドモ6歳以上或ハ20歳以上ノ青年男女＝來ルコト稀ナラズ其ノ症狀經過等小兒ノ夫ト何等異ル所ナキナリ。即チ余ノ症例ハ15歳以下ノ小兒38例(76%)＝シテ, 16歳—30歳11例, 30歳以上＝其ノ1例ヲ見タリ。

小兒ハ最幼3歳ノ1例＝シテ4—5歳ヨリ10歳迄ノ小兒＝最モ多シ(31例)之ニ次グヲ11—15歳及ビ16—20歳トス。

先輩諸氏ノ報告ハ本症ハ小兒＝限ルト謂ハルルガ, 余ハ16歳以上ノ青年期乃至壯年期＝其ノ12例ヲ見タリ。此レ余ガ先輩諸氏ト其ノ見解ヲ異＝セル所ナリ。

4) 季節の關係 余ノ症例ハ第5表＝示セルガ如ク夏及ビ秋＝多ク, 春之＝次ギ冬ハ最モ少シ。井尻, 高木兩氏モ亦夏期＝多キガ如シト云ヘルガ, 關氏ハ之＝反シテ冬季＝多シト謂ヒ, 小野澤氏ハ夏季及ビ冬期＝最モ多シトセリ。夏季＝多キハ皆一致セル所ナルガ冬期ハ余ノ症例＝テハ最モ少ナカリキ。要スル＝本症ハ夏期＝頻發スルガ又他ノ季節＝モ隨時發生スルト見做スコトヲ得ベシ。

第 4 表

年 齡	例數
3—5歳	13
6—10歳	18
11—15歳	7
16—20歳	7
21—30歳	4
30歳以上	1
計	50

第 5 表

春(3—5月)	10
夏(6—8月)	21
秋(9—11月)	15
冬(12—2月)	4
計	50

5) 誘 因 其ノ大多數ハ不明ナレドモ多少其ノ誘因トナレルヤト思ハルル者數例アリ。

イ) 夜尿症2例, ロ) 同時＝腸炎ヲ有セル者1例, ハ) 麻疹後ノ氣管支炎1例, ニ) 17歳ノ男子＝シテ海水浴ノ翌日ヨリ發病セル者1例, ホ) 29歳ノ男子＝シテ過勞ト感冒ト思ハルル者1例, ヘ) 成年男子＝シテ腸惡シキニ終日遠足ノ翌日ヨリ發病1例。

6) 症 狀 イ) 主訴 尿意頻數, 血尿(殆ンド皆終末出血)及ビ排尿痛ヲ訴フ。全例＝於テ此ノ3主訴ヲ缺ゲルモノナシ。或ハ先ヅ尿意頻數ヲ來シ次デ血尿及ビ排尿痛ヲ來スコトアリ, 或ハ排尿痛ヲ先驅トシテ次デ尿意頻數及ビ血尿ヲ來スコトアリ, 或ハ三者殆ンド同時＝突發スルコトアリ。

排尿痛ハ男子＝アリテハ多クハ會陰ヨリ尿道口＝放散ス。幼兒ハ其ノ疼痛ノタメ故意＝排尿ヲ中斷スルコトアリ, タメ＝結石ノ疑ヒヲ以テ「レントゲン」撮影ヲ行ヘル者數例アレドモ結石ヲ見ズ。又尿意頻數ノタメ夜間屢々排尿スル者多シ。膀胱部多クハ壓痛ナシ, 然レドモ遺殘尿存スル時ハ壓痛又ハ排尿感ヲ訴フ者アリ。

ロ) 全身症状 一般ニ之ヲ認メズ發熱モ多クハナシ。37度2—3分位ノ輕度ノ熱發ハ存スルコトアリ。

7) 尿所見 皆酸性ニシテ特ニ「アルカリ」性ノモノヲ見ズ。常ニ濁濁又ハ血性濁濁ヲ呈シテ透明ナルコトナシ。

蛋白ハ常ニ存ス、血性濁濁強ケレバ愈々其ノ量ヲ増ス。糖ハ陰性ナリ。

赤血球ハ常ニ存在ス。肉眼的ニ血液ヲ混ゼザル濁濁尿ニモ常ニ之ヲ證明ス。上皮細胞ハ常ニ多少存在ス。結晶ハ之ヲ證明セズ。

イ) 膿球 膿球ノ所見ニ就テハ關、高木、木村、淺見氏等ハ膿球ハ之ヲ缺如スルカ或ハ極メテ僅少ニ之ヲ證明スルニ過ギズト云ヘルガ、小野澤氏ハ多クノ場合之ヲ認メ、71例中12例ニハ殊ニ

第 6 表
尿中膿球ノ所見

膿 球 ナ キ 者	4
膿球アル者	少数 11 中等 17 多数 18
計	50

多數ニ之ヲ認メタリト云フ。余モ亦其ノ大多數ニ(50例中46例ニ之ヲ認メタリ。即チ第6表ニ示スガ如ク50例中膿球ヲ缺如セルハ只4例ニシテ他ノ46例ハ之ニ存ス。中18例ハ其ノ膿球數甚ダ多ク17例ハ中等度ニシテハ、11例ハ少數ノ膿球ヲ有シ大體小野澤氏ノ所見ト相似タリ。尙ホ其ノ少數例ニハ淋巴球ヲ認メタルモノアリ。

ロ) 細菌 50例中34例(68%)ハ全ク無菌ナリキ。此ハ特筆スベキコトニシテ他ノ16例(32%)ハ大腸菌、球菌、重球菌等ヲ認メタレドモ其ノ菌數モ少ク之ガ膀胱炎ノ原因ナリトハ考ヘラレズ、寧ロ健康尿道ニ存スル程度ノ細菌トシカ思ハレズ。高木、淺見、木村、關氏等モ無菌ナリト謂ヒ、小野澤氏モ其ノ大多數ハ無菌ナリト云ヘリ。

8) 治療 先ヅ安静ヲ要ス。13例ハ入院シ37例ハ外來ニテ治療セリ。先ヅ安臥セシメ下腹膀胱部ニ溫湿法ヲ施シ「ロートX」又ハ阿片肛門坐藥等ヲ用ヒ(小兒ニハ年齡ニ應ジテ之ヲ數個ニ切りテ用フ)、「ウワウルシ」葉煎、「ウロトロビン」等ノ尿路消毒劑、健胃整腸劑、「ピラミドン」ノ如キ解熱劑等ノ内服ヲ與フ。尙ホ「イスラビン」注射ヲ行ヘルモノ數例アリ。

9) 経過及ビ豫後 極メテ良好ニシテ輕キハ2—4日ニシテ既ニ輕快スル者アリ。其ノ大多數ハ5—10日ニシテ治癒ス。長キ者ニテモ2週乃至18日位ニテ治癒ス。關、高木、木村、淺見、小野澤氏等モ多クハ1—2週間ヲ以テ全治スト謂ヘリ。

10) 膀胱鏡ノ所見 膀胱鏡ヲ行ヘル者7例アリ14歳以下ノ患兒ニハ施リザリシヲ以テ之ヲ批判スルコトヲ得ズ。小野澤氏ハ5例ニ於テ膀胱鏡ノ検査ヲナシ其ノ所見ハ何レモ膀胱粘膜一般ニ發赤シ血管擴張シ時ニ出血點ヲ認ムルモ潰瘍、異物、結石等ヲ認メズト云ヘリ。

余ハ15歳ノ男兒2名、19歳—29歳ノ成年男子4例、25歳ノ女子1例計7例ニ就テ膀胱鏡検査ヲ行ヘリ。其ノ所見ヲ綜括スレバ、膀胱ノ粘膜ハ一般ニ充血シ血管ハ擴張ス(只1例ノミ三角部及ビ上壁ニノミ充血ヲ見タリ)、其ノ充血ハ三角部ノミニ限ラズ膀胱粘膜一般ニ亘レリ。

又膀胱ノ上壁、後壁、側壁及ビ底部等ニ散在性ニ充血斑及ビ溢血ヲ見ル、時トシテ其他浮腫及ビ糜爛ヲ見ルコトアリ。潰瘍ハ之ヲ認メズ。

11) 原因 關氏ハ膀胱ノ異常收縮ニヨリテ一時的ニ局所ノ血壓増進ヲ起シ無傷ノ毛細管又ハ血管ノ破裂ニヨリ血尿現ハルベシト考ヘ、高木氏ハ尿中ノ尿酸鹽類ノ刺戟ニ因ツテ膀胱頸部或ハ尿道攝護腺部ヲ損傷スルニアラズヤト謂ヘリ。淺見氏ハ8例中只1例ニ尿酸結晶ヲ證明シ小野澤氏ハ結晶ヲ證明セズト謂フ。余モ亦50例中1例モ結晶ヲ證明セズ。井尻氏ハ夏季ノ濃尿ニ關係アルベシトシ、小野澤氏ハ本症ガ寒冷及ビ酷暑ノ候ニ頻發スルハ外界溫度ノ變化等ガ大人ニ比シテ感ジ易キ小兒ニ影響シ本症ヲ起スニ至ラシムト考フト謂ヘリ。

附 感 冒 性 膀 胱 炎 ニ 就 テ

昭和6年余ハ「濕潤寒冷ニ因ル急性膀胱炎ノ1例」ヲ報告セリ(皮尿誌第31卷1189頁參照)。本例ハ16歳ノ男子ニシテ11月中旬終日雨中ニ野球見物ヲナシ全身濡レ且ツ寒氣強カリシガ翌々日より熱發、血尿、尿意頻數及ビ排尿痛ヲ來セルモノニシテ、尿ハ著シク渾濁シテ凝血ヲ混ゼリ。蛋白多量ニシテ膿球極メテ少ク多數ノ赤血球ヲ見ル外細菌ヲ認メザリキ。膀胱鏡所見トシテハ膀胱粘膜ハ著シク發赤シ浮腫ヲ呈セリ。其浮腫ハ上壁ニ於テ殊ニ甚シク又膀胱粘膜ノ全體ニ亘リテ所々ニ溢血斑及ビ糜爛ヲ見タリ。腎ノ機能ニハ異狀ナカリキ。其經過ハ極メテ良好ニシテ入院後3日ニシテ下熱シ排尿ノ回數ヲ減ジ、4日ニシテ血尿止ミ、8日ニシテ排尿痛モ去リ尿ハ透明トナリ入院後12日ニテ全治退院セリ。

泰西ノ文献ヲ徵スルニ小野澤氏モ云ヘルガ如ク歐米ノ學者ハ膀胱炎ノ發生ハ麥酒ノ過飲又ハ Cantharidin, Terpentin 等ノ藥用ニ因ル純化學的刺戟ニ因ルモノノ外ハ必ズ病原菌ノ存在ヲ必要ト見做セルガ如シ。Casper 及ビ Wildbolz 等ノ著書ニ依ルモ感冒ハ其ノ誘引トナレドモ之ノミニテ膀胱炎ヲ起スコトヲ記載セズ。

Teleky (1927) ハ春季發動期ノ處女ノ多數ニ排尿障礙ヲ觀察セリ。其ハ尿意頻數及ビ排尿痛ヲ訴ヘタルガ尿ハ正常ニシテ膀胱鏡的ニハ三角部充血ノ外異常ナカリシト云フ。

A. Lieben (1929) ハ下肢又ハ下腹部ノ冷却ニ因ツテ Erkältungscystitis (感冒性膀胱炎)ヲ起スコトアリト云ヘリ。氏ハ婦人ノミ觀察シタルモノニシテ冬期ニモ起ルガ夏季冷水浴後濕潤セル衣服ヲ着テ長ク大氣中ニ曝露セル場合ニモ發生ス。其ノ症狀ハ急性膀胱炎ト同様ニシテ膀胱鏡所見トシテハ三角部ガ著シク充血セリト云フ。又「インフルエンザ」ノ際男女共ニ膀胱炎ヲ起スコトアリ、膀胱鏡的ニハ粘膜ノ所々ニ發赤溢血ヲ見ルノミナラズ小潰瘍ヲ見ルコトアリ、其處置トシテハ共ニ膀胱洗滌及ビ Urotropin ノ内服又ハ注射ヲ賞用スト。氏ハ又此ノ「感冒膀胱炎」及ビ「インフルエンザ」ニ發セル膀胱炎ヲ共ニ katarrhalische Cystitis ト謂ヘリ。

感冒性膀胱炎ト特發性急性出血性小兒膀胱炎トノ異同問題

余ハ兩者ノ症狀經過及ビ膀胱所見ヨリ其ノ疾病本態ノ異同ヲ考察スルニ種々ノ點ヨリ兩者ノ

間ニ一脈ノ相通ズル所アルノ覺エシムルモノナリ。

イ) 兩症ノ相類似セル點 1) 突發的ニ發生ス, 2) 尿意頻數, 血尿及ビ排尿痛, 3) 尿中無菌ナルコト, 4) 經過極メテ良好ニシテ何レモ短時ニテ治癒シ再發セズ, 5) 膀胱鏡の所見

後者ニ於テハ臨床上ヨリ假定スルトキハ膀胱ノ症狀ハ可ナリ激シケレドモ多ク熱發ナク全身症狀ニモ殆ンド異狀ナキヲ以テ, 又殆ンド終末出血ヲ有スルヲ以テ單ニ膀胱三角部及ビ頸部ノミノ炎症ノ如ク豫想セラルルガ膀胱鏡の所見ニテハ其ノ程度ノ差コソアレ(14歳以下ノ小兒ニハ施サザリシヲ以テ之ヲ批判スルコトヲ得ズ)膀胱ノ粘膜ハ一般ニ充血シ血管ハ擴張ス, 其ノ充血ハ三角部ノミニ限ラズ上壁, 側壁, 後壁, 底部ニ散在性ニ著シキ充血及ビ溢血斑ヲ見ル。

ロ) 兩症相異レル點 前者ハ全身症狀トシテ熱發4—5日間持續セシガ後者ノ場合ニハ殆ンド熱發ナシ(然レドモ37度2—3分ノ微熱ヲ有セン者ハ膀胱鏡検査ヲ行ヘル7例中4例アリキ)。

余ハ兩者ヲ比較シテ得タル知見ヨリ本疾患ハ膀胱ノ寒冷ニ因ルモノナラント考フ。四季ノ別ハアレドモ夏季ニ海水浴, 河水浴アリ又寢冷アルガ如ク溫暖ノ時期ニ油斷ノタメ却テ下腹部冷却等ヨリ得ベキコトナリ, 即チ下腹部冷却ニ因ツテ膀胱及ビ其ノ附近ノ臟器ニ血行異常ヲ起シ遂ニ急性ノ膀胱炎ヲ起スニアラズヤ。他ノ時期ニ多少ノ多寡ハアレドモ本症ハ四季ヲ通ジテ何時ニテモ突發スルコトヲ得ト説明シ得ベシ。

次ニ本症ガ男童乃至成年男子即チ男性ニ多キ理由トシテハ説明ニ苦シム所ナルガ, 男性ニ多キハ尿道ノ長サニ正比例スル譯ニテ, 尿道ノ長サハ尿排出ノ便利ニ反比例スト見做サザルヲ得ズ。即チ尿道ノ長キ男性ハ其ノ短キ女性ヨリ尿鬱滯ヲ起シ易キ理ナリ。故ニ余ノ考察ニ依レバ尿ノ稍々鬱滯セル時ニ寒冷ガ加ハリ遂ニ充血ヲ起シ茲ニ炎症ヲ惹起スルニアラズヤ。

12) 本症ノ命名ニ就テ 尙ホ本症ノ命名ニ就キテハ「本症ノ歴史」ニ於テ述ベシガ如ク, 先輩諸氏は依ツテ種々ノ名ヲ冠セラルルモ余ハ小野澤氏ノ「特發性急性出血性小兒膀胱炎」ヲ最モ合理的ト思フ。然レドモ其ノ病名ガ餘リ冗長ニ過ギ且ツ成人ニモ稀ナラザルヲ以テ16歳以下ノ小兒ナラバ「急性出血性小兒膀胱炎」成人ナラバ「急性出血性膀胱炎」或ハ簡單ニ「感冒性膀胱炎」(Erkältungscystitis oder Blasen erkältung)ト稱ヘテモ差支ナキカト考フ。

要スルニ本症ノ原因ハ尙多クノ研究ヲ要スベキ問題ナルガ, 余ハ小野澤氏ガ始メテ多數ノ症例ヲ集メテ詳細ナル統計の觀察ヲナシタル勞ニ對シテ敬意ヲ表セント欲ス。

Ⅵ. 結 論

- 1) 余ハ滿10ケ年間ニ50例ノ特發性急性出血性小兒膀胱炎(小野澤氏)ヲ觀察シタリ。本症ハ小兒ニ頻發ス, 殊ニ4—5歳ヨリ10歳迄ノ小兒ニ最モ多シ。然レドモ又青年期ニ來ルコトモ稀ナラズ。余ノ症例ハ15歳以下ノ小兒38例(76%)ニシテ16—30歳11例, 30歳以上ニ1例アリ。
- 2) 本症ハ男性ニ多ク(90%), 女性ニ少ク(10%), 夏及ビ秋ニ多ク春之ニ次グ。

- 3) 本症ハ尿意頻數, 排尿痛及ビ血尿(終末出血)ノ3主徴候ヲ有スルヲ特異トス。全身症狀ハ多クハ之ヲ缺如ス。
- 4) 尿ハ濁濁又ハ血性濁濁ヲ呈シ, 蛋白ハ常ニ存シ, 白血球ハ多ク之ヲ存ス。細菌ハ多クノ場合認ムルコト能ハズ往々大腸菌, 球菌, 重球菌ノ類ヲ認ムルコトアレドモ膀胱炎ノ原因ト認ムルコト能ハザル程度ニ少數ナリ。此レ本症ノ特徴トスル所ナリ。結晶ハ認ムルコト能ハザリキ。
- 5) 経過及ビ豫後ハ極メテ良好ニシテ其ノ大多數ハ5—10日ニシテ治癒シ長キモ2週乃至18日ニテ治癒ス。
- 6) 膀胱鏡所見ハ三角部ノミニ限ラズ膀胱粘膜一般ニ充血シ諸所(上後側壁及ビ底部等)ニ著シキ充血斑ト溢血ヲ散在性ニ認ム。
- 7) 本症ノ原因ニ就テ余ガ嘗ツテ報告セル「感冒性膀胱炎」ト比較スルトキハ其ノ症狀, 尿ノ所見, 経過及ビ膀胱鏡所見等ニ於テ相類似スル所少ナカラズ, 且ツ本症ガ男性ニ多キヨリ見レバ本症ノ原因ハ尿潴留ト寒冷トガ重要ナル意義ヲ有スルニアラズヤ。
- 8) 本症ノ命名ニ就テ余ハ簡單ニ「急性出血性膀胱炎」又ハ「感冒性膀胱炎」ト稱シ若シ16歳以下ナラバ之ニ「小兒」ナル字ヲ冠セント欲ス。

文 献

- 1) 豐福環: (大正3年)。
- 2) 高木鑒: 皮尿誌。第22卷(大正11年)。
- 3) 關嘉一: 兒科雜誌。第265號(大正11年)。
- 4) 大道直一: 皮尿誌。第29卷(昭和4年)。
- 5) 木村賢二: 日泌尿會誌。第19卷(昭和5年)。
- 6) 駒屋銀治: 日泌尿會誌。第19卷(昭和5年)。
- 7) 井尻辰之助: 日泌尿會誌。第19卷(昭和5年)。
- 8) 高橋明: 日泌尿會誌。第19卷(昭和5年)。
- 9) 久保山高敏: 皮尿誌。第31卷(昭和6年)。
- 10) 小野澤武男: 日泌尿會誌。第21卷(昭和7年)。
- 11) H. Wildbolz: Lehrbuch der Urologie. 1924.
- 12) D. Teleky; Zeitschrift f. Urologie. Band. 21, 1927.
- 13) A. Lieben: Zeitschrift f. Urologie. Band. 24, 1930.